広がる国際貢献の輪
AMDAの15年 ▽上△

岡山市に本部を置く国際医療ボランティア団体・AMDAが今年、設立十五年を迎えた。「顔が見えない」と批判されることも多い日本の国際貢献だが、非政府組織（NGO）の立場からAMDAが地道に続けてきた活動は、すでに世界約四十五カ国に及ぶ。十日から岡山県内で開かれる「第六回NGOサミット」を前に、AMDAの足跡をたどり、国際貢献の今後を探る。

一人ひとりの意識が支え

緊急救援

岡山市楢津にあるAMDA本部。ジュネーブ（スイス）の国連機関から毎日届く難民情報のファクスやインターネットのホームページなどにスタッフが目を凝らす。

大地震、洪水、地域紛争…。大量の被災者や難民が予想される事態に対し、直ちに医師、看護婦ら医療チームを送り込む。これが、AMDAの海外活動の柱の一つ、緊急救援活動だ。

派遣の対象となるのは、一般人の死者が百人を超えるような自然災害や紛争など。一人でも多くの人命を救うため、七十二時間以内の診療開始を原則とする。

この一年だけでも、一月のコロンビア大地震をはじめ、八月トルコ大地震、九月東ティモール紛争、台湾大地震、十一月インドのサイクロン、ベトナム大洪水。瞬発的に現地で診療活動を展開するフットワークの軽さには目を見張る。

■活発な活動

AMDAの設立は一九八四年八月。岡山市の開業医・菅波茂医師（三）がアジアの医師に呼び掛けて作った「アジア医学生国際会議」を前身に、アジアでの医療救援活動を目指し、「アジア医師連絡協議会」として誕生した。

今年4月、コソボ紛争によって生まれた難民に対し緊急救援活動を行い、診療に当たるAMDAの医師＝アルバニア北東部クケス、AMDA提供

ソマリア難民救援（九三年）、ルワンダ難民救援（九四年）と毎年、医療チームを派遣して負傷者らの手当てに当たる。実績を積み重ねる中、九五年五月には国連NGOに認定された。

界全体では約二千人を数える。

緊急救援活動は、九〇年代以降、活発化。フィリピン・ピナツボ火山噴火による被災者救援（九二年）、

■綱渡り

数多くの救援プロジェクトを展開するが、順風満帆というわけではない。九五年のロシア・サハリン大地震では、受け入れる側の理解が得られず、空港で一時、入国を拒否された。

即座に緊急派遣に応じられる医師の確保は綱渡り。募金や寄付頼みの活動資金は、国内で報道されず一般の人の目に触れない地域での活動に対しては、調達に苦労するという。

「だが、医者として困っている人がいれば、どこの国の人であろうと何とかして助けたい」。約十年前からAMDAの活動に参加している三宅和久医師（三七）＝岡山市津島本町＝が話すように、一人一人の強いボランティア意識が活動を支えている。

今年四月のコソボ紛争では、日本政府に先駆けて難民キャンプに入り、診療活動を始めた。政治や国境にとらわれないNGOの役割を再認識させ、外務省の民間援助支援室も「国民の間でもNGOの活動に対する理解が一気に深まった」と評価。これまで対象外だった緊急援助活動にも国の補助金を出す道を開いた。

NGOへの理解深まる

■地球規模

緊急救援を行う地域は、現地政府や国際的な救援活動がまだ始まっていなかったり、救援の手が届かない地域も多い。「マラリアなど風土病や二次災害といった危険もあり、メンバーはまさに命懸け」と会員情報局を担当する小池彰和さん（六一）。

日本からの一方的な救援ではなく、いつでもどこの場所からでも緊急救援活動が行える地球規模でのパートナーシップが、AMDAの目標。このため、緊急時に即座に対応できるよう各国の医師で組織する「AMDA多国籍医師団」や、各国NGOとのネットワークづくりも進めている。

三宅医師は「できる範囲のことを積み重ねる。それが重要」と話す。一人ひとりの小さな意識と行動が活動の輪を広げ、大きな国際貢献につながっている。